

帆 檣成林

—はんしょうせいりん—

新潟市歴史博物館
博物館ニュース
vol.15

「帆檣成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。人が多く出入りする活気ある「みなと」をイメージさせる言葉です。

CONTENTS

- ◆特集1 五周年感謝祭を振り返って P.2-3
- ◆特集2 「米とくらし」展 P.4

- 常設展示室から ヤツメツツ(ヤツメドウ) P.5
- おすすめの冊子 『市民の考古学5 倭国大乱と日本海』 P.5
- みなとびあ研究notes 初代五姓田芳柳画「新潟萬代橋図」について P.6
- 館長日記 古代エジプトと日本(二) P.7
- 収蔵資料紹介 蓄音器(三光堂グラフォフォン) P.7
- 博物館を支えるモノ・もの のりつきパネル P.8



新潟市歴史博物館
博物館ニュース
帆檣成林
Vol.15

新潟市歴史博物館の催し物

2009年1月～2009年3月

企画展	企画展関連イベント・講座	体験プログラム
1月	11/15～ 「第5回むかしのくらし展」 「米とくらし」	11日 マユダマをつくろう、かざろう 18日 みなとびあで自然を感じてみよう 24日 布をおってみよう
	25日 博物館講座 29日(全2回) ワラゾウ作り 30日	
2月	～2/1	7日・8日 清少納言の知恵の板 15日 みなとびあで自然を感じてみよう
	2/14～ 「安吾を育んだ新潟・人・歴史」展	22日 博物館講座 28日 民具講座①
3月	1日 館長講座① 7日 民具講座② 8日 館長講座②	1日 かみしばい 1日 バックヤードツアー
	～3/8 3/20～4/12 新収蔵品展	14日 民具講座③ 15日 館長講座③ 22日 館長講座④ 15日 みなとびあで自然を感じてみよう

※詳細につきましては、当館HP、または博物館までお問い合わせ下さい。

企画展開催中

第5回 むかしのくらし展「米とくらし」

■会期 2008年11月15日(土)～2009年2月1日(日)
■開館時間 9:30～17:00(観覧券の販売は、閉館30分前まで)

	一般	団体
大 人	500円	400円
大学生・高校生	300円	240円
中学生・小学生	200円	160円

■休館日
月曜日(月曜日が祝日の場合は火曜日)
祝日の翌日
※団体料金は20名以上で適用となります。
※中・小学生は、土・日・祝の観覧料が無料となります。

関連体験プログラム(申し込みが必要です)

ワラゾウ作り 【日時】1月29日(木)・30日(金)(全2回) 14:00～16:00
【会場】本館1階体験の広場 【定員】両日参加可能な大人15人
【参加費】無料 【申込み締切】1月20日(火) 必着

申込みは往復はがき・電子メールに、①氏名 ②住所 ③連絡先電話番号
④参加希望する関連企画名を記入して博物館まで(応募者多数の場合、抽選)

2008年度 博物館講座

毎月第4日曜日、当館学芸員が講師となり、調査や研究を進めている内容を報告します。
【会場】博物館本館2階セミナー室 【資料代】100円 当日会場へお越しください。

- 1月の講座
【テーマ】「蒲原平野の農具」(森行人 学芸員)
【日時】1月25日(日) 13:30～15:00
- 2月の講座
【テーマ】「角田・弥彦山麓の生業に関する民俗学的考察」(岩野邦康 学芸員)
【日時】2月22日(日) 13:30～15:00

◆申し込み・詳細につきましては当館HP、または博物館までお問い合わせ下さい。

○お問い合わせ先
新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10 TEL025-225-6111 FAX025-225-6130 URL: http://www.nchm.jp e-mail:museum@nchm.jp

博物館を支えるモノ・もの

Vol.1 のりつきパネル

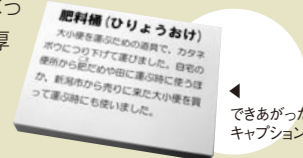
博物館を支えているモノや道具を紹介する新コーナー。記念すべき第1回は、「のりつきパネル」をご紹介します。



▲キャプションづくり

「のりつきパネル」は、発泡スチロールのパネルの片側全面にのりが付いているものです。紙原稿をのり面に貼り、カッターで成型して、解説や写真パネル、展示資料のキャプションなどを作ります。貼る紙のサイズが大きくなればなるほど、紙とパネルの間に空気が入りやすくなったり、パネルの厚みから、切り口がずれてしまうこ

ともあります。きれいに貼るには少しコツが必要です…。他にも、見やすいようにパネルに角度を付けたり、資料の高さを調整したりと、展示のいろいろな場面で使われます。展示室で多用されていますので、みなさんも展示室で探してみてくださいね。



できあがったキャプション

次回企画展

「安吾を育んだ新潟・人・歴史」展

■会期:2009年2月14日(土)～2009年3月8日(日)

	一般	団体
大 人	600円	480円
大学生・高校生	300円	240円
中学生・小学生	無 料	

※団体料金は20名以上で適用となります。

■開館時間:9:30～17:00
(観覧券の販売は、閉館30分前まで)
■休館日:月曜日(月曜日が祝日の場合は火曜日)、祝日の翌日
■主催:財団法人新潟市芸術文化振興財団/新潟市/新潟市歴史博物館

次回企画展

新収蔵品展

■会期:2009年3月20日(金)～2009年4月12日(日)
■観覧料:無料
■開館時間:9:30～17:00、9:30～18:00(4月～)
■休館日:月曜日(月曜日が祝日の場合は火曜日)、祝日の翌日

編集後記

新年明けましておめでとうございます。昨年は、みなとびあをご愛顧いただき、真にありがとうございました。今年も引き続き、みなとびあをよろしく願い申し上げます。『帆檣成林』15号、いかがでしたか。今号の特集は、開館5周年感謝祭について、主催者であるボランティアスタッフの方が書いてくれました。ボランティアの方々の5年間の思いが伝わる記事となっています。ぜひご一読ください。(土田)

むかしのくらし展「米とくらし」唐箕の特集展示



五周年感謝祭を振り返って

新潟市歴史博物館ボランティア

伊豆田 芳宏

平成二十年十月十三日(日)午前十時「感謝祭の開会を宣言します！」甘粕館長の声が雲ひとつない紺碧の空に響き渡り、新潟市歴史博物館みなとびあ開館五周年感謝祭が幕開けしました。

「この建物は明治二十年十月、関税業務を行う役所、新潟税関として竣工したものです。港町新潟を象徴する建物です。眼下に流れる信濃川を眺めながら当時の面影を偲んでみてください。」国の重要文化財・旧新潟税関庁舎塔屋では、参観に訪れた市民にボランティアが丁寧に解説しています。

敷地内では感謝祭に参加してくれた音楽家による透き通った歌声が流れる中、敷地内ガイドツアーを行っているボランティアは、多数の市民に小型メガホンで解説しています。「昭和二年に建造されました旧第四銀行住吉町支店です。この建物の特徴は厚重な石張りによる…」

本館体験の広場は、親子を中心として数多くの市民が集まり「これ、どう回すの?」「わりばし鉄砲って、どう作るの?」「飛んだ、飛んだ」などと体験



感謝祭 たいけんひろば

仕事をさせて貰って五年目、いろいろ新潟の人々からお世話を受けており、少しでも恩返しをしたいと気持ちから応募しました。十一月十八日、新潟市万代市民会館ホールでの最初の説明会に参加しま

ボランティアへの応募

ボランティアに質問したり、指導を受けたりと、賑やかなことこの上もない盛況です。一方、常設展示室に目を向けると、「信濃川・阿賀野川と二つの大河は新潟市から日本海に注いで…」、「このコーナーは縄文時代から弥生、古墳時代の…」、「長岡藩領だった新潟町は天保十四年、上知され幕府直轄領になり…」などと、常設展示室を数ポイントで分け、ボランティアが、ひっきりなしに訪れる市民に熱心に解説しています。私は、それぞれの持ち場で頑張っているボランティアの仲間を見ているうち、開館当時の状況を思い浮かべました。

研修の開始

年が明けた十月十九日、第二回目の研修も、新潟市万代市民会館で行われました。二月以降は、新潟市歴史博物館で「体験の広場」「敷地内ガイド」それぞれの担当に分かれ、個別研修や実践研修を受けました。特に敷地内ガイドは、ポイント毎の解説資料が配布され、各自が工夫を凝らし、自分のものにしてようと必死で勉強をしていたようです。私も、自分なりにガイドする口語体の文に書き改め、何とか三十分以内で解説ができるように資料を作り変え、実践研修に備えました。しかし、講師の学芸員や研修仲間の前でいざ実技、となると、なかなか上手く解説ができずかなり悩んだものです。

自信を喪失?

中には資料を見ることなく、立板に水のごとく流暢なガイドをやる研修生がいて、私などは落ち込んだものです。この人は、地元テレビ局で開館直前の当館を紹介するニュースで、その見事なガイド振りを披露していました。このテレビを見た新潟県民は「みなと

びあボランティアのレベルは相当高い」と思ったのではないのでしょうか。ということは、私もそう見られる可能性がある??不安な気持ちのままデビュー戦を迎えることになりました。

〇八名のみなどびあボランティアの誕生

開港当時の面影漂う信濃川左岸に完成した新潟市歴史博物館は、多くの新潟市民が待ち望む中、平成十六年三月二十七日に開館し、私もボランティアも開館と同時に誕生しました。説明会には二〇〇余名。研修会では二三名になり、最終的に二〇八名で新潟市歴史博物館みなとびあボランティアは発足しました。

不安と緊張の中でのデビュー戦

私のデビュー戦は開館一週間後の四月四日でした。それまで何回も現場に赴き自己訓練を積んでのデビュー戦でしたが、やはり極度の緊張と不安な状態で臨んだのです。

最初にガイドをしたのは、確か四、五名で来館してくれた六十年代前後の男女のグループでした。「ボランティアガイドの伊豆田といいます。これから敷地内をガイドさせていただきます。この建物は二代目新潟市役所庁

舎の外観を模して建てられたものです。」と、ここまででははつきり覚えていますが、その後、新潟奉行所から新潟県庁舎、初代新潟市役所等の説明をしているうち、あれ程覚えた年号等をすっかり忘れ、頭の中が真っ白。後はどうしてガイドしたのか今もって分かりません。「レベルが高い??」「この騒ぎでなく、ただ、失敗したことだけは確実でした。その場を一旦離れ、信濃川のほとりで大きく深呼吸し、自分の資料を読み直し、頭を整理してから再度挑戦し、完璧ではありませ

時の経過と共に湧き出る「こころ」

イアとは単なる社会奉仕活動くらいとしか考えていませんでした。従って前述の「こころ」が台頭してくるのです。その浅はかな考えを根底から覆してくれたのが、「ボランティア活動の基本」と題した講演を拝聴してからです。他からの強要や義務と違い、個人の自発的な自由意志に基づいて行い、活動を通じて他の人とのかわりができ、新たな人間関係を生み、お金で得られない出会い・発見・感動・満足感が得られ、独自の考えによって先駆的で想像性豊かな活動ができる。

まさに目から鱗でした。みなとびあボランティア伊豆田芳宏の考えが一八〇度変わったのはこの時です。

- また、館側のボランティア活動に対する基本方針
- 博物館をより深く利用したい人々に、博物館にかかわってもらう活動
- 博物館のおもしろさ、楽しみ方を見出し、ってもらう活動
- 余暇の過ごし方の一環として、それぞれの楽しみ方を追求してもらう活動を理解していなかったことも、「こころ」の二因でした。

ボランティアの顔がわからない

平成十九年の秋、ころから、ボランティア同士の会話で、「ボランティアが発足して三年以上にもなるのにボランティアの顔がわからない。」「ボランティアの横の繋がりが全くない。」等々の話が出るようになりました。そうした中、ボランティア担当の学芸員からボランティア主導によるボランティアレターの

五周年感謝祭の開催



感謝祭 常設展示室

月例会やその他の場面で、開館五周年に対し何らかのアクションを起こすべき、との話が一部で囁かれた。館側からも同様の話があり、双方で検討し五周年記念イベントの開催を決定しました。

地元各団体等からの協力を得る

博物館と同じ町内に住むボランティアの方の働きかけにより、地元の各団体の協力を得ることができました。当日、当館広場に屋台のテント村が出現し感謝祭を盛り上げていただきました。また、音楽イベント担当の責任者は人脈により、本格的なオペラ歌手、二胡エレクトーン奏者、コーラスグループ、にいがた樽砦、大正琴グループ、新潟民謡踊り、下駄総踊り響連等からの参加を得ることができました。

博物館とボランティア一丸となって

博物館職員・学芸員とボランティアが一丸となって活動を行いました。この日、午後四時の終了時間までの来館者数は実に六〇〇名に及び、事故もなく、皆さんに楽しんでいただきました。こうして感謝祭の幕を静かに閉じることができました。

本当に感謝です。
(いずた よしひろ)

「米とくらし」

森 行人

みなとびあでは、第五回むかしのくらし展「米とくらし」を二月一日(日)まで開催中です。

新潟市域は、越後平野の中央、平野を貫流する信濃川の最下流部に立地します。現在の市域には、整然と区画された美田が広がっています。しかし、大規模な排水施設が整う以前は、大小の水路が交錯し、湯が点在する低湿な土地でした。平坦な地形のために、年中水がたまりやすく、こうした深田に農家は毎年土を入れて土かさを上げて、田の収穫を維持していました。

今回の展覧会では、当時の農業で用されていた道具をできるだけたくさん集めて展示しています。深田の作業に不可欠な道具をはじめ、昭和初期ごろに市域で使われた農具など約一六〇点を展示しています。中には現在の稲作からは想像もできない道具があります。キツォはその代表です。

キツォは田で使う舟で、深田で収穫した稲を載せて押ししたり、ひいたりして運びました。水がたまった田での稲の輸送にキツォは欠かせない道具でした。同じく深田での稲刈りで使うカシキ、葦原をひらいて新田を作る時に使うヤチキリガマ、ほかにもセンバや土臼など、江戸時代から使われてきた数多くの道具を展示しています。また、

手回し脱穀機や近代唐箕、除草機のように、鉄の歯車を組み込んだ、明治以降に開発された農機具も展示しています。

こうした網羅的な資料展示を、当館所蔵の資料だけで行うことは困難です。そこで、資料を市域の博物館や資料館などから借用して展示しました。

中でも湿田農業に特有な資料は、できるだけ複数の資料を展示するようにしました。たとえば、複数の区で使われたカシキを並べて展示すると、カシキを使う農業やその基盤となる風土が市域で共通性を持つことがひと目でわかります。一方で、西区や西蒲区の施設が保存する高台状のダイカンジキ・ハコカンジキという資料を展示しましたが、同種の道具にバリエーションがあることは、共通性の中の個性です。市内各区の諸施設が保存している資料を借用し、並べて見比べると、各地域の個性に気づくこともできます。

今回の展覧会では、同種の資料をできるだけたくさん集めた「特集展示」も行いました。市域で使われた唐箕を全部で三三台集めた展示です。唐箕は稲作の脱穀調整作業で、モミとワラクズ、玄米とモミガラ等を選別する道具です。江戸時代後期には市域でも使

用されるようになり、近代に入ると米作りに欠かせない道具として各農家に普及しました。

一三三台の唐箕は、半数は当館所蔵資料、後の半数は各区の施設の資料を借用したものです。現在、市の施設全体では六〇台以上の唐箕を保存しています。数が三三台となったのは展示室の面積の都合ですが、これだけ多く集めて見比べると実に多くのことを発見できます。

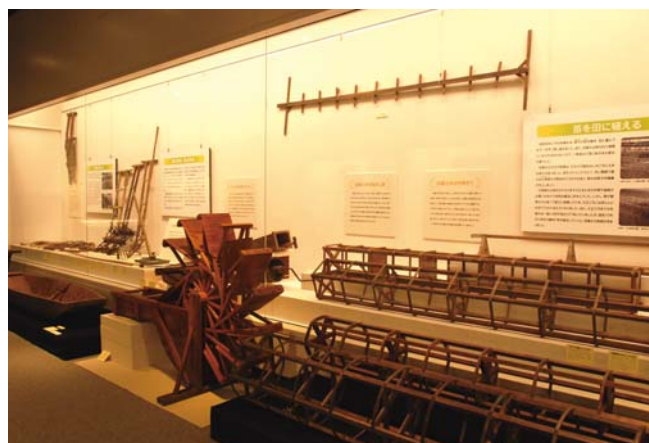
まず古い資料が含まれています。最も古い唐箕は文久元(一八六二)年、約一五〇年前のもので、この江戸時代から明治・大正・昭和と、各時代の唐箕を見比べると、形態や仕組みの違いがあることに気づきます。この違いから、製作技術の進化や使用する側の作業の効率化への志向を読み取ることができます。

また、実は三三台の中には、ほぼ同じ形をした唐箕が含まれています。これは極めて興味深いことです。たとえば、前述の江戸時代の唐箕には「巻請合(職人名)」との墨書がありました。鏡潟周辺の各施設には、職人名は異なるものの、同じ型で「巻請合」と書かれた唐箕が保存されていました。西蒲区巻には複数の唐箕作りの職人がいて、江戸時代末から明治まで活動してい

たこと、巻の唐箕を鏡潟周辺の農家が買い求めていたことを教えてくれます。

より広い範囲の資料を並べて見比べることで、資料情報が一層広く深く見えてくることを改めて実感しました。新市域全体の共通性と各区の個性を、ともに地域の歴史として再発見し、地域像を豊かに構築していく上で、各区が伝えている資料が、各区にとっても新潟市全体にとっても重要であることがわかります。

(もり ゆきひと 学芸員)



常設展示室から — ヤツメツツ(ヤツメドウ) —

信濃川、阿賀野川の河口では江戸時代からヤツメウナギ漁が盛んに行われていました。ヤツメウナギは、ウナギに似た姿をした生き物で、生物学では魚類とは異なる無顎類に属する脊椎動物として知られています。ビタミンAを大量に含んでいて、古くから眼の病によい食べ物として好まれていました。

新潟市域では、ヤツメウナギを獲る漁法として、網漁とならんで釜漁が行われていました。釜という漁具の歴史は古く、縄文時代から使われていたことが分かっています。内部に返しがある構造の漁具で、生き物がいったん入ると抜け出せなくなってしまう仕組みになっています。新潟市周辺でポピュラーだった釜漁には、ドジョウを獲るために田んぼの脇の水路にしかけた「ドジョウツツ(泥鰌筒)」などがあります。ドジョウも新潟市域の名産品で、「亀田泥鰌」などは、大正～昭和初期の最盛期には日本各地へむけて専用列車が編成されるほど獲られていました。

信濃川の河口のヤツメウナギ漁では、釜としては巨大な「ヤツメツツ(八目筒、ヤツメドウともいった)」を使った漁が盛んに行われていました。ヤツメウナギの漁は秋の終わりから冬に行われ、ヨシ(カヤ)で作ったヤツメツツを、縄で縛って5～10個くらい連結させ川底に沈めておく漁法でした。ヤツメウナギは夜行性のため、夜の間に掛けておいて朝あげに行きました。獲ったヤツメウナギは生のまま売のほか、干したものが機織りの盛んだった信州の松本(長野県)、上州の高崎(群馬県)などの地方で売れたそうです。これはヤツメウナギが目によく、とくに「寒の日の日」に獲れた

ものは、機の上へぶら下げておいてもきき目があるという俗信があったためだそうです。

初代萬代橋の写真の橋桁のところに引き上げられたヤツメツツがたくさん写っていたり、佐渡へ渡った江戸時代の地理学者、小泉蒼軒が、佐渡の水津湊から新潟湊へ帰る際に、信濃川河口でヤツメ漁の浮子として使われていた樽をみたことを記録していたり、新潟の湊について資料調査を行っているとき意外なところでヤツメウナギ漁に出会うことがあります。

新潟市域の漁業については、展示室後半の「蒲原平野の村々」のエリアにコーナーを設けてあります。あまりひろいコーナーではありませんが、今回紹介した釜をつかった漁の外に、浜の地曳網やネズラ下駄漁なども紹介していますので、ご覧になってください。

(岩野 邦康 学芸員)



左の大きな筒がヤツメツツ

おすすめの1冊

『市民の考古学5 倭国大乱と日本海』

甘粕 健編 同成社
二〇〇八年十月

みなとびあの「館長講座」が本になりました。当館の館長講座は、甘粕館長自らがコーディネートする全四回の連続講演会です。本書は、「日本海域における弥生の戦乱と古墳の出現」をテーマに、二〇〇七年三月に開催した同講座の記録集です。弥生時代後期から古墳時代前期に至る激動の時代、日本海域で覇を競った出雲・丹波・越等の諸勢力の交流と興亡の軌跡を考古学の成果から明らかにすることを目的に開催した当講座では、それぞれの地域ごとに島根大学教授の渡辺貞幸氏、五條文化博物館館長(当時)の石部正志氏、金沢学院大学名誉教授の橋本澄夫氏、そして当館甘粕館長が講座を担当しました。

本になるきっかけは、熱心な受講生である渡辺知夫さんが自主的に録音とテープ起こしをしてくれたことにあります。あらためて感謝いたします。

本書は市民を対象にした講座の記録であり、わかりやすくまとまっています。ぜひ、読んでください。当館でも販売しております。

(小林 隆幸 学芸員)



初代五姓田芳柳画「新潟萬代橋図」について

大森 慎子

「新潟萬代橋図」の作者、初代五姓田芳柳〔文政十(一八二七)～明治二十五年(一八九二)〕は、明治時代の幕開けとともに開港場横浜や浅草を中心に活躍した画家です。西洋画を見て衝撃を受け、「横浜絵」「写真画」「隈絵」と呼ばれた絹地に彩色し「西洋絵画のよいうな陰影をつける方法を独自に編み出しました。息子の義松には本格的な西洋画を修めさせ、五姓田派と称される一派を成しました。近年、神奈川県立歴史博物館を中心に五姓田派の研究が進められ、昨年「五姓田のすべて―近代絵画への架け橋―」展が開催されました。この展覧会で新潟に関する作品の多さが特筆されています。

明治十九(一八八六)年十一月に完成した初代萬代橋を描いたこの絵は、新潟に関する代表作のひとつです。しかし初代芳柳作品の中では特異な一点といえます。写真に元を描いていますが、元の写真には人影はわずかです。写真に写る人に脚色を加え、人や馬や船が描き加えられています。人々には正装させて祝祭的な雰囲気を出しています。肖像画や美人画作品に見られる西洋画のようなりアリエイの追求は見られず、個性を付けつつも一様にやや丸顔の人物は立居姿に固さがあり、やや大仰なポーズは演劇的一幕を見ているようです。落款が無ければ初代芳柳の作品とは考え難いほどです。

彼の風俗画的な作品は、この他に郡山市立美術館所蔵の「風俗図屏風」(制作年不詳)があります。紙に水彩で描かれ、萬代橋図とも大分イメージが異なる作品ですが、丸顔の人物、人力車や盲目の人等描かれた人物の内容に共通点が見られます。丸顔の人物は、息子義松や娘幽香の作品にも見られます。義松の西洋画の師チャールズ・ワグマンはデッサンで市井の人々を丸顔に描くことが多いので、芳柳は市井の人々を描く時に、これをイメージして描いたのかもしれない。なぜ、この絵は萬代橋完成後、数年の時を経て明治二十一年に描かれたのでしょうか。

この絵の注文主は、当時第四銀行頭取の八木朋直です。八木は、元米沢藩士で、新潟県の役人を経て第四国立銀行の設立・経営に尽力しました。後に市会議員や市長もつとめ、当時の新潟を代表する政財界人の一人です。八木は萬代橋架橋事業に私財を投じて資金援助しました。八木はこの功績への思いが深く、晩年狂歌を詠む際に架橋翁と号していました。

芳柳は、明治十八、十九年には新潟や近郊で肖像画を多く描いています。二十年五月には八木と夫人の肖像を描いています。萬代橋の完成を祝してこの萬代橋図が描かれたならば、もっと早く描かれていても良い気がします。気になるのは画中に描かれた

橋名板です。これは、初代萬代橋に実際につけられ、明治三十三年に取り外されて現存する鋳物の橋名板と酷似しています。橋名板の元になった柳原前光の書には「応八木内山両氏属」と書かれています。しかし、現存の橋名板は鋳造後に二部切り取られて詰めた跡があり、「応八木氏属」とあります。

初代萬代橋の施工費は素材の変更や金利の変動などで予算をはるかに上回り、架橋を計画請願した内山信太郎は、竣工後すぐに所有権の半分を八木の名義にしました。その後も橋詰から沼垂の町までの道の整備がされないために橋の利用は少なく、橋銭の収入が上がらず、借金返済の目処が立たなくなつた内山は、結局明治二十二年五月に萬代橋の権利を全て八木に譲ります。内山の名をはずした橋名板が描かれているこの絵は、内山の全権譲渡を予告しているかのようです。

八木の萬代橋に対する思いが、絵の



「新潟萬代橋図」(網本着色 明治21年 当館所蔵) 部分拡大



作品のもととなった写真

中だけでも自分の独占物として描かせたのでしょうか。明治二十一年に描かせたことには何か思惑があつての事でしょうか。ちなみに絵の元となった写真には、この橋名板ではなく木札の橋名板が写っています。四月二十五日から開催予定の「(仮称)五姓田 GOSEDA―明治新潟の人々を描いた絵師」展では、この「新潟萬代橋図」のほかに五姓田派の新潟市内県内に関わる作品を紹介します。五姓田派と新潟との関係には、ほかにもまだ多くの謎が潜んでいます。みなさんも推理してお楽しみください。(おもしろい しんこ 学芸員)

古代エジプトと日本(二)

屋形さんによれば、エジプトのヌビア支配はおおよそ次のように段階的に展開しました。

古王国時代には、ヌビアに接する南端の州の長官が、エジプト化したヌビア人を通訳として、第二急湍と第三急湍の間の下ヌビアに遠征し、ヌビアと交易をしてエジプト王に莫大な富をもたらした。エジプトは下ヌビアの北と南の要衝に最初の要塞都市を置いたが、まだ明確な辺境支配の意識はなく、要塞都市は金を円滑に運ぶための拠点にすぎなかった。長官の遠征隊は交易品とともに最大二万七〇〇〇人に達するヌビア人を連れて来ている。エジプトには職業的な軍人はおらず農閑期の農民を兵士としていたので、ヌビア人傭兵はエジプトの重要な戦力であった。

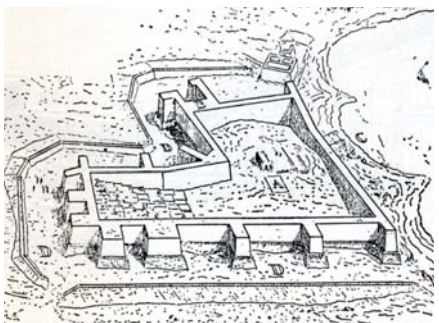
第一八王朝は、西アジアとヌビアに先制防禦的な二正面作戦を展開し、軍事大國化する。そのリアクションとしてヌビアの反乱が激化するが、歴代エジプト王の親征により反乱は鎮圧された。エジプトは上ヌビアの第四急湍までを併合し、最大版図となる。ヌビアには、エジプトの首都テーベの太陽神であるアメンラーを祭る神殿都市が建設され、信仰面からもエジプト化が急速に進んだ。

末期王朝時代には、上ヌビアのナバタに土着の王国が出現した。この王国は、エジプトでは衰退したアメンラー信仰の復興を旗印に北上して逆征服を果たし、テーベを首都として第五王朝を作った。奥州平泉の藤原氏が天下を取ったような話で、歴史の面白さを感じられます。(あまかす けん 館長)

館長日記

DIARY FROM THE DIRECTOR OF A MUSEUM

この後エジプトはヒクソスにより征服されるが、ヒクソスを追い出した後の新王国時代にはエジプト民族主義が高ま



セムナの要塞(復元図) 第12王朝 (『世界考古学大系』第13巻、平凡社、1960)

収蔵資料紹介

蓄音器(三光堂グラフォフォン)

写真の蓄音器は、三光堂という日本のメーカーが大正三三(一九三三)年に製造販売していたものです。新潟市内の商店が使用していました。個人で楽しむほかに、来店者を楽ませたり、客引きに利用したかもしれません。

この蓄音器の動力はゼンマイです。右側面のハンドルを回し、ゼンマイを巻きます。レコードをターンテーブルの上のコードに針をのせると、レコードの溝から針が振動を受けます。サウンドボックスという針の上部にある丸い部分がその振動を増幅し音にして再生する、という仕組みになっています。

レコードを使う平円盤式の蓄音器には、写真のような形のほかに、持ち運び可能なカバン型のポータブル蓄音器や、ラップ部分が



蓄音器 (三光堂グラフォフォン)

初期の蓄音器は写真のような平円盤式の蓄音器ではなく、円筒式の蝸管をメディアとしました。三光堂は円筒式蓄音器の輸入販売を手がける会社として発

足しました。その後、平円盤式の蓄音器とレコードが登場し、レコードの大量生産技術が確立します。欧米のメーカー各社が凌ぎを削り、性能を向上させていく中、日本でも蓄音器生産を行うため、明治四十二(一九〇九)年には日米蓄音器商會が設立されました。明治四十二(一九〇九)年には本格的に平円盤式蓄音器の生産が始まります。日米蓄音器商會の設立に関わった三光堂は、その後、自社でも蓄音器を生産します。このモデルは国内生産開始からわずか四年後に生産され、三十円から五十円ぐらいで販売されました。昭和三二(一九二八)年に、全国に先駆けて岡山県が県税として蓄音機所有に課税します。その後、他県もそのアイデアを導入し、新潟県も昭和十二(一九三六)年から楽器税として蓄音機に課税します。税額は、蓄音器一台につき五十銭、電気蓄音機は三円の課税で、毎年支払うものでした。不景気の中、税収を少しでも上げるための方策に蓄音器も一端を担わされていったのです。

参考文献 梅田晴夫「蓄音機の歴史」(PARCO出版局、一九七九年九月) 倉田喜弘「日本レコード文化史」(岩波現代文庫、二〇〇六年〇月)

(藍野 かおり 学芸員)